

教材の特徴を生かした読みの活動

—「読むJ641」授業報告—

高橋 純子

要 旨

本稿では、2010年1～3学期、および2011年1学期の4学期に渡る「読む641」の授業を概観する。「読むことを楽しむ」を第一の目標とし、読解教材を選択、配置した。「読む」という活動を通し、学習者の既習の日本語知識を統合し、読んだものに関して考え、意見、感想が言え、書けるようになることを目指し、指導した。さらに、文中で学んだ語彙・表現などの定着を図り、それらを使えるようにするため、読み物毎に小テストを作成し、実施した。また、背景知識が必要な読み物に関しては教師が全てを説明するのではなく、多読の課題として学習者に調べさせ、発表させることを試みた。物語のその後の展開を創作する、俳句を詠むなど読み教材に関連する創作活動も取り入れた。発音、イントネーションの練習として音読の回し読み、グループ読みなどの練習も取り入れた。

【キーワード】 読むことを楽しむ 意見交換 小テスト 多読 音読練習 創作活動

Reading Activities in Regard to the Reading Materials : a report on an intermediate reading class

TAKAHASHI Junko

【Abstract】 This is a report on Japanese reading class activities for intermediate students. The most important objective is to “enjoy reading”. Accordingly, the author chose appropriate reading materials and arranged the reading order based on this principle. Reading in a classroom does not only mean decoding texts, but also requires the students to think over what they read and express their interpretations either orally or in written form, which can be shared and discussed using their acquired language skills. The author prepared small tests to help the students remember vocabularies and expressions in the texts. As an extensive reading practice, students were asked to collect information concerning the background of the texts. Students were challenged with creative writing tasks, such as writing Haikus, or developing a story they had read. Practicing reading aloud in the whole class and in small groups helped the author to correct the students’ pronunciation and intonation.

【Keywords】 enjoy reading, exchange of ideas, small tests, extensive reading, practicing reading aloud, creative writing

1. はじめに

本授業は、中級前半レベルの日本語学習者を対象とする。学習者は筑波大学留学生センターの日本語補講コースの各レベル（100～500）を経て進級してきた者、自国などで日本語を学びブレースメントテストによってこのレベルに配置された学生が混在する。

教科書に出てきた読みの教材は読んだことがあるが、まとまった長さの読み物を日本語で自発的に読んだ経験のある者は少ないようである。それでも、日本の文学作品の翻訳物や漫画、アニメなどで日本の出版物などに親しんだ者は、日本の文化社会に関する背景知識が豊富で教材への取り組みも積極的で、親和度が高いようである。一方、専門の勉強、研究に集中し、人文関係の書物はあまり読まないという受講生もいる。そのような多様な受講生の読む能力を中心に、「話す」「書く」の活動も取り入れ、全般的な日本語力を伸ばす工夫を探り、試行してみた。

中級前半レベルの日本語学習者の「読む力」を伸ばすためには、遠回りのように見えても他の技能も磨くことが欠かせないと筆者は考える。「読む」ということは、読んだものを理解し、それについて考え、その考えたことを他者に伝える、という一連の活動を含む。それを想定して試験を作成し、評価している。このレベルの学習者の日本語力全般の向上にとって、この類いの練習は不可欠であろう。

2. 受講生

各学期の受講生の内訳は次の通りである。

1. 各学期の受講生数と国籍

2010年度-1学期	26名 不合格者：出席不良3名	中国10、韓国5、アメリカ4、英国2、ドイツ1、ポーランド1、リトアニア1、ウズベキスタン1、カザフスタン1
2010年度-2学期	26名 不合格者：出席不良2名、 受講取り消し1名	中国7、台湾3、ウズベキスタン3、韓国2、タイ2、ロシア2、ドイツ2、アメリカ1、ウクライナ1、エストニア1、インドネシア1、カザフスタン1
2010年度-3学期	29名 不合格者：出席不良4名、 成績不良2名	中国11、韓国6、ウズベキスタン3、台湾2、アメリカ2、ドイツ2、ベトナム1、ロシア1、ブラジル1
2011年度-1学期	23名 不合格者：出席不良1名、 成績不良2名	中国12、ウズベキスタン2、台湾1、タイ1、インドネシア1、ラトビア1、カザフスタン1、ロシア1、アメリカ1、イギリス1、エジプト1

3. 授業の概要と手順

授業は週1回75分で1学期10週が平均的であるが、学期により祭日などが重なり9週の時もあった。以下のような手順で授業を行った。

1) これから読む教材に関しての興味、関心を引き出す活動

テーマに関する学習者の知識、経験などを共有する。翌週から読みに入る教材で背景知識が必要なものは学習者に調べてくるように促し、翌週、読み物に入る前に発表させた。各学期の使用教材とその活動内容については巻末の参考資料を参照されたい。

例：俳句・川柳について調べてくる、

「窓際のトットちゃん」の作者黒柳徹子について調べてくる、

友人に血液型を尋ねてくる、などである。

2) 読み物の黙読

まず辞書を見ずに始めから終わりまで読んでみる。多少長い物語の読み物（「車の客」「一杯のかけそば」など）に関しては、適当なところで区切り、3部構成くらいにし、その後の展開を考えさせるなど「予測読み」の活動を行う。受講生の日本語力や作品によっては教師が始めのページのみ音読し、これから展開される読み物のイメージを掴みやすくし、理解を助けることもある。

3) 1回目の黙読で分かったことを学習者から聞き出す。

さらに物語の流れを掴んでいるか確認する質問を教師が問い、内容の大まかな理解を確認し、不確かなところを2回目の読みで確認させる。

4) 再度黙読

内容理解質問と語彙・表現の書かれたワークシートも配布し、その答えと上述の教師からの質問の答えを探しながら読む。

5) 学習者同士（2～3名）でワークシートを中心に答え合わせ

答えの根拠となる文章も示すよう指示する。

6) 教師指導によるクラス全体での内容確認

教師が整合的質問をし、話の流れ（原因と結果）、登場人物像を把握し、省略部分や指示詞の確認、関連語彙の紹介、背景知識との照合、などをしながら精読の読みを進める。その過程で学習者の知識や経験を問う周辺の質問も行う場合もある。

7) 学習者同士での意見交換

学習者同士（2～3名）で読んだものに関して感想・意見を話し合う。

8) グループで話し合ったことをクラスで共有する。

それぞれのグループで出てきた意見・感想をクラス全体に述べ、他のグループの学習者の意見を聞く。

9) 音読練習

川柳・俳句などの読みの練習は七五調のリズムを体得するため、教師の後についてクラス全体で行う。会話文の多い物語などはナレーション部分も含め、配役を決め小グループで行う。クラス全体で一文ずつ読んで行く回し読みも行う。

10) 小テスト

1つの読み物を読み終わった翌週、その読み物の小テストを行う。内容は、その読み物に出てきた主要な語彙の漢字の読み方、表現の使い方、自分の意見を書く、というものである。

以上が一般的な授業の展開であるが、学習者の反応を考慮しながら授業を進行していくため、思った通りの時間配分ができないこともある。それでも、学習者の意見、経験を聞き出す作業やインターネットなどから日本語のHPを読み、背景知識などの情報を集めてくるという課題は、その後の読みを促進する働きをしていると考える。以下、それぞれの活動の例を挙げながら見ていきたい。

4. 背景知識となる情報収集課題

多読 (extensive reading) の練習の1つとして、主教材となる精読教材の背景知識を調べてくるなどの課題を与えた。その狙いの1つは、国籍をはじめ、それぞれの専門、文化背景、読書経験の異なる学習者ができるだけ同じラインでスタートできるようにするためである。もう1つは「日本語で読む」という活動が授業内にのみとどまることなく、「日本語で読む」技能を一種の道具として日常的に使う習慣を身につけさせるためである。

例1：読解教材の著者について調べてくる。

「楽しい制約」の著者佐藤雅彦、「窓際のトットちゃん」の著者黒柳徹子、「日本人の質問」の著者ドナルド・キーンについて調べてくる。これにより、作品にも親近感を感じ、読み物にもスムーズに入っていける。著者についての知識やそれに基づくイメージがあり、読んだ後の話し合いにおいても、枠が広がるようだ。特に、メディア・クリエイターという職業の佐藤雅彦について知識を得た後では、単純な表現形式で様々なことを表現できること、さらに制約があるからこそ想像力や創造力を働かすことができるのだ、ということを学習者はより深く理解していたようであった。「楽しい制約」の教材のみを読んだのであれば、大学の研究室での出来事にとどまっていたのだろうが、著者が大学の教授になる前は電通で広告の仕事をし、様々な映像の業績を残していることなどを学習者が知ったことで読み物を異なった角度からも鑑賞できていたようだ。

本報告で取り上げた授業以前の授業では、教師が著者について、その経歴や周辺情報を用意し、授業で伝えたが、学習者自身に調べさせた方がより効果的であると実感した。人から与えられる情報より、自分自身で調べたことの方がより身に付くようである。

例2：「血液型による性格判断」では、周りの人の血液型を聞いてくる、という課題を与えた。本教材は、新出語彙・表現が多く、その羅列といった読み物で、構成、展開という

視点からはほとんど考察する余地のないもので、筆者としては差し替えたいと考えていたのだが、受講生にとっては日本人学生と話す格好の話題になるらしく、「興味深い」「楽しい」という意見が多く、性格を表す語彙・表現を学ぶという観点から読む教材に今学期(2011-2学期)も加えた。そして、学習者自身も含め、実際に知っている人の血液型とその性格と教材に書かれている血液型別性格を比べてみる活動は、学習者にとって、具体的に確かに興味をそそるものであるらしい。自分の家族や友人の性格が読み物に書かれている通りであるのか、そうではないのか、具体的例を挙げて説明させるという口頭表現の練習としても有効に使うことができる。

例3：俳句・川柳について調べてくる。2010年3学期に実施した授業である。日本語のリズムである七五調を学ぶために「俳句・川柳・標語」というワークシートを作成した。俳句、川柳の一般的基本知識を学ぶものである。質問形式になっており、関連語彙を使用した穴埋め問題や、よく知られている俳句の季語、季節、その解釈を問うものである。このワークシートの配布に先立ち、俳句・川柳について調べてくるよう指示をした。この学期の学習者は随分と力を入れて調べ、発表した。それぞれが様々な句を持ち寄り、その解釈も披露した。筆者が用意した基本的知識の教材の先を行くものであった。この情報収集と発表の後、学習者は、自然に俳句・川柳(標語も含む)の世界に入っていけたように観察する。

例4：教材「一杯のかけそば」では「師走」「睦月の月が…」と陰暦の月の読み方が出てくる。そこで、この月の読み方を調べてくるという課題を出した。簡単な調べものではあったが、学習者の友人の名前が弥生だったり、サツキという名前の知人がいたり、と名前と生まれ月とに関係があったことを発見した学習者もいた。

5. 長めの読み物での予測読み

「読む」という活動が字面を追う表面的な「解読＝decoding」で終わってしまわないよう、まず全体を把握する習慣を指導し、予測読みを促した。逐語的に読むのではなく、不明の語は前後の文脈から推察する習慣をつけさせる目的である。また、ある程度の長さの読み物を読んだ、という達成感を感じ、その後の読むことを楽しむ動機付けになることを期待し、長めの読み物を配置した。その例は、星新一著「車の客」、栗良平著「一杯のかけそば」、黒柳徹子著「電気の町」である。これらの読み物には「繰り返し」という特徴がある。同じような事、事件が時を変え、繰り返されるのである。よって、原型となる筋を理解すれば、その後の読みが容易になり、結果として、ある程度まとまった作品を読むことになるのだ。さらに、まとまりのいいところで区切り、その先の展開を学習者に想像させ、話させたる、書かせる、などの活動を組み入れることができる。

それでも「一杯のかけそば」はかなり長いものであったため、学期の終わりに難易度、長さなどが適当であったかどうか、学習者の負担になっていないかどうか、アンケート調査をした。結果は不満の声はなく、難易度においても概ね満足という答えであった。「繰り返しが多かったので分かりやすかった」という教師の狙い通りのコメントも見られた。

6. 創作活動

教材のテキスト構造、話しの展開パターンを利用し、それに基づいた創作活動を行った。前述のように「読む」の授業は、「書く」「話す」あるいは「聞く」も含む、受容と表出の両方の活動を通して学習者の日本語力向上に貢献しようとするものである。読んだものが知識としてのみとどまるのではなく、出来る限り「体験」として学習者に身につけてもらいたいものである。そこで、創作活動を組み入れた。教材のテキスト構造、人物像、場面、状況をよく理解して初めていい創作が生まれる。学習者が教材を俯瞰的に捉えているか、逐語訳な解釈にとどまっていないか、を確認する手だてにもなる。

例1：俳句・川柳の創作

五七五の17音字に季語を入れ、俳句の創作を行った。授業時間に、簡単な基本規則、「季語は2つ使ってはいけない。1つの俳句に1つだけ使う」「ひらがな一文字が一音になる」などを教え、短い時間ではあるが創作活動を行い、宿題として完成作品を提出させた。学生の作品をコピー配布し、鑑賞の時間を設けた。よく知られている有名な句の鑑賞では解説文を読むという方向に行きがちだが、学習者同士でそれぞれの作品を評価し合うという活動は、学習者が自分の感じたこと、連想したこと、考えたことを自由に言い合うよい口頭表現の練習になった。

しかし、俳句を「読む」のと「詠む」のでは大変な違いで、知識として五七五のリズムだと理解していても、いざ作らせてみると、ひらがなのモーラの感覚が理解できていない学習者がいることが判明した。初級レベルの学習者に対しては、ひらがな一文字が一拍ということを体得させるのが教師としては習慣になっているため、中級の学習者は当然そのことを理解していると思っていたが、実はそうではない、ということを知らされた。

学習者は俳句を詠むのには苦労したが、俳句・川柳に関しての知識を得て鑑賞することには興味を示した。特に川柳は句の意図が理解できた時のすっきり感と読めば自然に笑いが出てくる楽しさを味わったようである。

例2：「雪女」のその後の展開を創作する。

いわゆる昔話の類いはどの国にもあるらしく、知っている自国の話しを紹介させてみるとまったく同じものではないが、似通った話しがあるようだ。そして、そこにはいくつか

の型があることがわかる。それは異界との接触で、こちらの世界、つまり人間界で生きることを決めたら、もう以前に住んでいた世界には戻れない、あるいは、異界の存在であることが他の人に知れたらもう一緒にはいられない、など共通する原型が見えてくる。「雪女」の読み物の枠組みを超えて、いわゆる「伝承文学」の型にまでおよぶクラスでの議論を経て、「雪女」のその後の展開を書かせ、発表させたところ、テキスト構造や登場人物の性格をうまく生かし、時空を超えた発想の興味深いものが出てきた。

興味深いのは、その後の展開が雪女に去られた親子のその後の生活を描いて完結させるグループと同じストーリーが今までも繰り返されてきたことを連想させ、今後も世代を超えてずっと続いていく話にしていくグループの2つがあったことだ。さらに後者では、子どもが女か男かで展開が異なる創造力豊かなストーリーを展開させていた。

例3：「車の客」のその後を予測しながら読む。

例2と似通った活動であるが、「雪女」では最後まで読んで、その後の展開を考えたのに対し、この教材では何回か繰り返される乗客のエピソード毎にその後の展開を考えさせ、また最後まで読んだ段階でその先を考えるという活動を行った。

学習者は作者、星新一の作風をよく真似、読んだテキストの構造を活用し、死者との会話の辻褄を合わせようと努力していた。

7. 音読練習

音読練習を巡っては賛否両論分かれ、その効果がどの程度なのか明確ではないようである。効果を積極的には認めてはいない教師も含め、およそ9割以上の日本語教師が授業で音読を実施しているという調査があった。その目的としては学習者に「気づきを促す」が最も多く、「内容理解」がそれに続いている。「教師によるチェック」つまり学習者の理解度や、予習してきているか、などを教師が把握するためや「体得・体感させる」という読むこと自体が目的になる場合もある。現在どこを学習しているのか文章に集中させる、音読でクラスを活性化させるなどの目的の「クラス運営上のテクニック」の1つとして分類されるものもあるようだ。この場合もクラス授業で音読をすることがより学習者を授業に引きつけることになるのか、逆に活気や緊張感を失わせてしまうのか、という異なった意見があるようだ。(茂住・足立 2004)

筆者は経験則から、また自分が受けた授業として発音練習としての「音読」を支持する。授業中での数回の音読で効果が即、現れるとは考えていない。受講生には初回の授業案内の際、教室での音読練習だけでは不十分であるから、家でも時間を作って一週間に1回でもいいから音読練習を試みるよう勧めている。他の授業で口頭発表の指導をしているが、やはり原稿やキーワードの書かれたメモなどを見て、家で練習してきた学生の発表は

その努力の跡が見える。漢字熟語など目で見るだけでなく、発音して、自分の身体、骨の全てを振動させた自分の声を聞いて欲しいと思っている。様々な目的で教師は音読練習をさせているようだが、目的は複合的でその効果もおそらく複合的なのではないだろうか。

音読をすることがマンネリになり、学習者に緊張感を失わせるという考えもあるようだが、学習段階にあった音読の仕方、タイミングがあるのではないだろうか。一人一文ずつを順番に、前の学習者が読み終わったらすぐにその後に続けて読み、全体として滑らかに読み進んでいくというクラス全体での回し読みの練習は、適度な緊張感を与え、自分のパートだけはしっかり読もうとする姿と、全体の流れを乱さないようにしようという姿勢が学習者に見られた。小グループでの回し読みや配役を決めての読み練習も行った。この場合は、教師のチェックを学習者全員に行き渡らせることはできないが、そのことがかえって、学習者同士で気軽に教え合い、補い合うなどででき、学習を促しているように観察した。

読解はまず音読から入り、語句の区切り方、漢字の読み分け、読み方の速さなどから学習者がどの程度の理解をしているかが大体掴める、(石田 1988) と石田敏子氏は述べているが、中級前期の学習者を対象とする「読む600」の授業では、文字情報と予備知識を含む非視覚的情報から、読みにおける予測のスキルを駆使し、どのくらい読めるかにまず挑戦させる。精読の説明中では学習者を指名して読ませ、その箇所注目させたりもするが、基本的には精読が終わり、学習者同士の意見交換も済み、テキストを全て理解した段階で何を目的に音読をするのか、を学習者に意識させ、音読練習に入る。また、読み物が1回の授業では完結せず、翌週まで続く場合など、前の週の所を音読しながら、記憶を喚起し、語彙や文型、意味などを確認することもある。

8. 小テスト

1つの読み物を読み終わった翌週、その読み物に出てきた主要な漢字語彙の読み、表現の使い方、各自の感想、意見などを書くという小テストを行う。毎回A4 1ページに収まる量である。小テストと課題(調べてくる課題や創作活動)で評価の40%になる。

その目的は、語彙の拡大と表現の定着、その使用を促すためである。読みの教材テキストに出てきた語彙や表現はその時は覚えていてもいざ再生させようとするときどこかあやふやだったり、不正確だったりするものだ。それを少しでも正確に定着させ、使えるようにしようという意図である。

小テストにより、漢字の読み方の清濁、促音の有無などを確認するとともに、学習者のあやふやな記憶、誤った理解を見つけ修正することもできた。「たまたま」と「たまに」、「つい」と「ついに」、「ただ」と「たった」など、このレベルの学習者は音で聞き覚えた語彙を感覚で使用していることが多く、教材に出てきた範囲ではあるが、修正することができた。

9. 評価

評価は、小テストと課題で40%、期末テスト40%、平常点20%であった。課題というのは、教材毎の内容理解ワークシートの提出、教材の背景知識となる情報収集、物語の展開を想像して書いてくるなどの課題である。日々の努力が成績に繋がるようにしようと考えた配分である。毎回の読み教材に関しては、内容理解ワークシートと小テストで既に学習者の理解を把握してあるため、期末テストの範囲は狭くし、最後に扱った教材から出題した。テスト形式は内容理解ワークシートと似通ったものである。教材毎のワークシートで解答の書き方なども指導しており、期末テストはそれまでの学習の集大成の意味がある。平常点は、日々の取り組みを観察した結果である。出席率が60%以上で、課題提出及び小テストの得点が80%以上であれば20点を与えた。進級者は、ほぼこの条件を満たしていた。

10. 今後の課題と展望

この4学期間に取り上げた読み物を見てみるとやや物語文に偏っているように思われる。読むことのハードルが高いと感じている学習者もいるため、興味を持って、先を読み進みたいという気持ちで物語に取り組んでもらいたい、という配慮の結果であるが、幅広い選択肢があったほうが良いだろう。「読む力」を養成するためには、様々なジャンルの読み物に接することが欠かせない。そして、「日本語で読む」ことが授業としての「読解」に留まることなく、日常生活をおくる上での道具の1つとして役に立つように実面的な面も養成していきたいと考える。その目的達成のために設けた活動の一つが教材の背景知識となる情報を調べてくるという課題であった。

ウェブ上から、あるいは書籍、雑誌、新聞、さらに友人知人などからの情報収集過程に関して、学習者たちは、どのような困難に直面したのであろうか。今後、この点に関して調査していきたい。さらに学習者が授業外のどのような場で、どのような文章を読む必要があるのか、どんな困難があるのか調査する必要があるのではないかと考える。文化・社会を知る教養としての読み教材と器具の使用説明書や料理レシピ、様々な広告、情報誌など実用的な読み教材も準備してはどうかと考えている。

1学期わずか10回の授業で「読む力」を伸ばし、次のレベルに進級できるよう育てるためには多読教材を多用することも必要だと考える。1つのテーマを中心にして、精読読解教材と実用読解教材、それに関連する多読教材を用意し、連携し合う形で使用できないかと考えている。抽象的な思考、想像力、創造力を促す教養的読み教材と、読んで情報を得て、それを利用し、ある問題解決をしていく、というより具体的な情報源としての実用読解教材である。構想の段階であるが、具体的な素材集めから始めていきたいと考えている。

「読む力」の評価とは何を評価するのであろうか。高度な「読む力」を身につけるには何が必要なのであろうか。課題や語彙・文法知識といった言語知識と学習言語の常識的、

背景的知識も欠かせないの言うまでもない。それに加え、テスト時の答案に書く文章が質問の答えとして妥当、且つ正確な文で書いてなければならない。読んだものに関して、自分の感想、考えが口頭であるいは文章で表現できなければ評価する側は学習者の理解度を判断できない。口頭表現力、そして文章表現力も求められるのである。このことを常に学習者に伝えておくことを忘れないようにしたい。

11. おわりに

「読む600」の授業では、読むのみの活動ではなく、書く、話す、聞く、の4技能を全て活用するよう授業を設計している。中級レベルではやはり総合的な力を伸ばしてこそその読解力だと考える。教養的読み物教材と並行して、印刷されたテキストに限らず、様々な媒体、例えば、テレビCMやニュース番組のサブタイトル、雑誌広告の見出しなど学習者が日常的に目にしているものなどからも文章を集め、読解教材化の可能性を探っていきたいと考える。

参考文献

- 石田敏子 (1988) 『日本語教授法』 大修館書店
天満美智子 (1989) 『英文読解のストラテジー』 大修館書店
北條淳子 (1982) 「読むことの学習段階」 『日本語教育事典』 大修館書店
北條淳子 (1990) 「読解の指導」 『日本語教育事典』 大修館書店
茂住和世・足立尚子 (2004) 「クラス授業で行われる音読に対する教師の目的意識～外国語学習者に対する日本語教育現場での調査から」 『東京情報大学研究論集』 Vol.8 No.1 : 35-44

参考資料

学期毎の使用教材と活動内容

	精読教材	情報収集活動	創作活動
2010年1学期	<ul style="list-style-type: none"> ・「楽しい制約」(佐藤雅彦著『毎月新聞』から) ・「日本人の質問」(ドナルド・キーン著 朝日選書『中級からの日本語 読解中心』新典社) ・俳句・川柳・標語の例を挙げて解説したワークシート(筆者作成) ・第一生命「サラリーマン川柳」 http://event.dai-ichi-life.co.jp/company/senryu/24th/best_10.htmlから筆者が選択した川柳40句) ・「走れメロス」太宰治著 青空文庫 http://www.aozora.gr.jp/cards/000035/card1567.htmlを編集 	<ul style="list-style-type: none"> ・「楽しい制約」の著者、佐藤雅彦について調べる。 ・「日本人の質問」の著者、ドナルド・キーンについて調べる。 ・俳句・川柳について調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・俳句・川柳の創作
2010年2学期	<ul style="list-style-type: none"> ・「雪女」http://hukumusume.com/douwa/pc/jap/01/22.htmを編集 ・「楽しい制約」(佐藤雅彦著『毎月新聞』から) ・「車の客」星新一 	<ul style="list-style-type: none"> ・「楽しい制約」の著者、佐藤雅彦について調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「雪女」のその後の展開を想像して書く。 ・「車の客」の最初のページを読み、その後の展開を書く。 ・「車の客」の最後のページを読む前に結末を考えて書く。
2010年3学期	<ul style="list-style-type: none"> ・「一杯のかけそば」栗良平 ・俳句・川柳・標語の例を挙げて解説したワークシート(筆者作成) ・第一生命「サラリーマン川柳」 http://event.dai-ichi-life.co.jp/company/senryu/24th/best_10.htmlから筆者が選択した川柳40句) 	<ul style="list-style-type: none"> ・陰暦の月の呼び名を調べる。 ・俳句・川柳について調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・俳句・川柳の創作
2011年1学期	<ul style="list-style-type: none"> ・「手で数を表す」(『大学・大学院留学生の日本語1読解編』アカデミックジャパニーズ研究会) ・「血液型による性格判断」(『日本語中級読解』アルク) ・「トットちゃん」(黒柳徹子著『中級からの日本語 読解中心』新典社) ・「電気の町」(黒柳徹子著『不思議の国のトットちゃん』新潮文庫) 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人学生に血液型についての考えを聞いてくる。 ・友人の血液型を聞き、教材の「血液型による性格判断」の記述と一致するかどうか考察する。 ・「窓際のトットちゃん」の著者黒柳徹子について調べてくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「血液型による性格判断」で出てきた表現を使い、その意味が伝わるような文章を作る。